

在外教育施設に派遣された教師に係る派遣効果に関する調査・分析

- **在外教育施設への派遣経験が教師の資質・能力にどのような効果を与えるか**を実証的に研究。
※エビデンスに基づく政策立案（EBPM：Evidence-Based Policy Making）を推進する総務省の実証的共同研究の一環として実施。
- 2021年12月から2022年3月までの間、教師・管理職へのアンケート調査及び派遣経験者・教育委員会へのヒアリング調査を実施し、統計的手法を用いて分析した結果、**在外教育施設への派遣経験が、多文化・多言語環境における指導能力やカリキュラム・マネジメント能力など、教師の資質・能力向上に繋がるエビデンスが示された。**

① 教師向けアンケート調査

能力等の伸びを定量的に把握・分析するため、派遣経験のある教師（派遣教師）とない教師（非派遣教師）に対して、**10年前（2011年度）と現在（2021年度）の自己の能力等に関する認識**についてアンケートを実施（有効回答数4,765名 うち、派遣教師1,818名、非派遣教師2,947名）

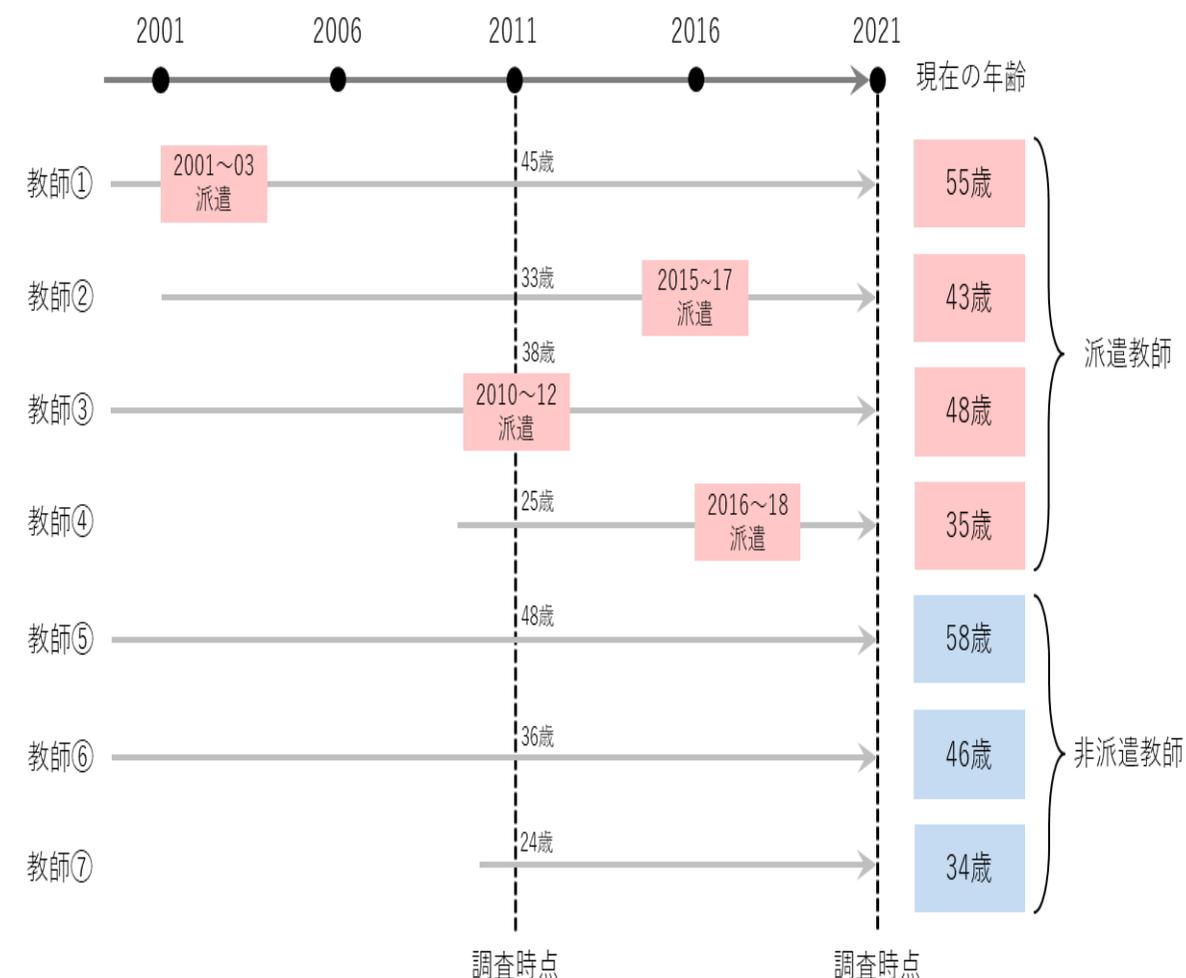
② 学校管理職向けアンケート調査

派遣教師と非派遣教師に対する認識について、**第三者的な立場である学校の管理職**にアンケートを実施。

③ 派遣経験教師・教育委員会へのヒアリング調査

派遣教師等へのヒアリングを組み合わせ、現地での活動内容や、能力等の向上に関する効果発現のメカニズムについて把握。

図 教師アンケートの対象者のイメージ



多文化・多言語環境における指導能力

児童生徒の文化的な多様性に適応させた指導をする能力がある

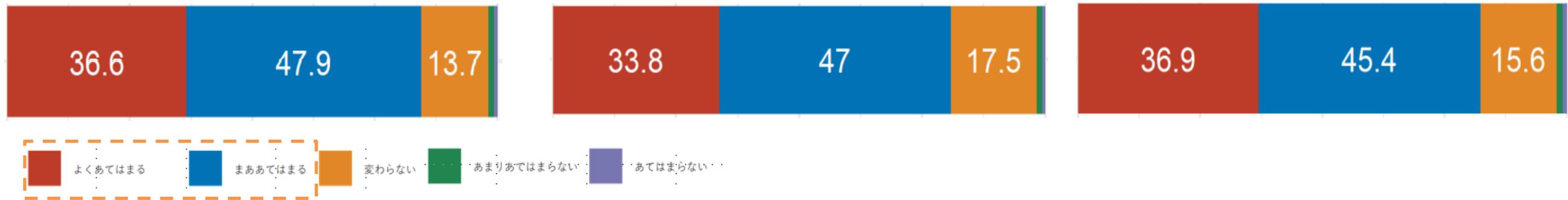
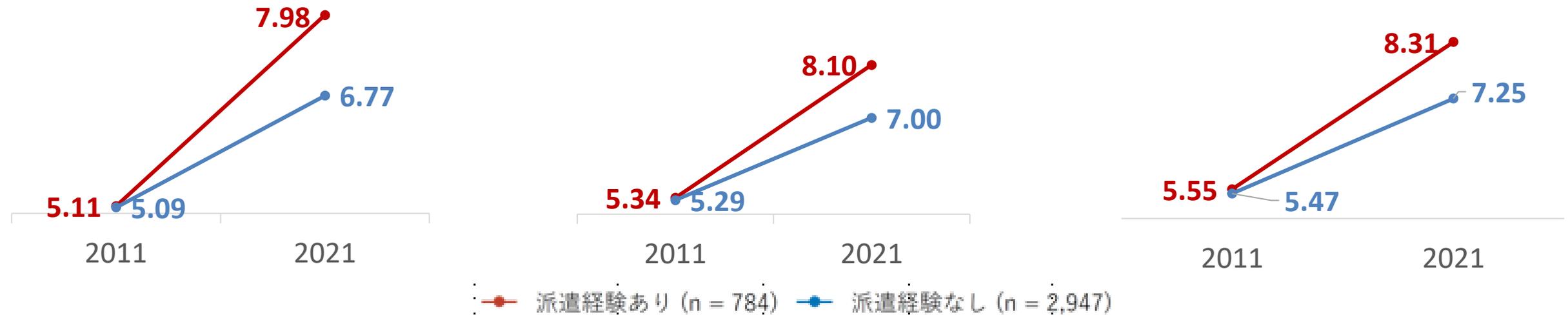
児童生徒間の文化的な違いへの意識向上や差別解消方法に関する指導をする能力がある

文化的背景に限らず、児童生徒や保護者が多様な価値観や背景を持っていることを踏まえて対応できる

個人アンケート

管理職アンケート

経験者の声



- 海外において、母語でない環境で学ぶことがいかに大変かについて体感したことで、帰国後は、逆の立場で、日本で頑張っている外国につながるのある子供たちを理解できるようになった。
- 在外教育施設では、様々な児童生徒がいるため、価値観が違って当たり前。最初は圧倒されたが、この経験を生かし、今では生徒たちにも、価値観が違うのは当たり前と伝えるようにしている。生徒も同じように感じるようになってきたと思っている。
- 現地では日本語が苦手な子供も在席しており、そうした子供に寄り添いながら支援したことが現在につながっている。現在、在籍している学校にも外国籍の子供がいるが、言葉が分からなくてもスポーツや遊びを通じて、コミュニケーションを図っている。自身が現地で生活したからこそ、外国籍の子供を理解できることもあると感じている。

2

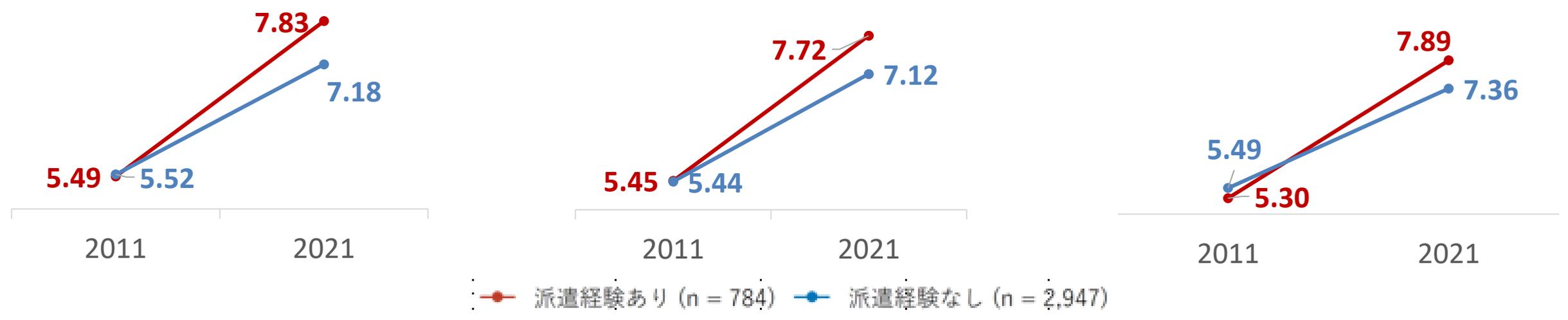
カリキュラム・マネジメント能力

児童生徒や地域の実態を踏まえつつ、育成すべき資質・能力を念頭に置いた指導計画を作成し、効果的な指導を行うことができる

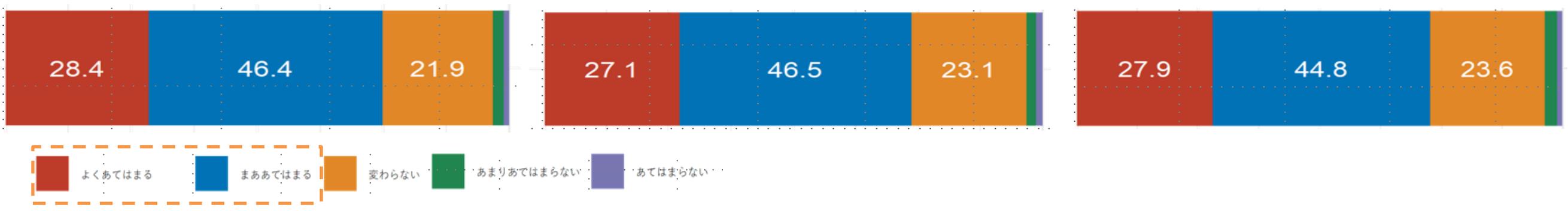
指導の実施後に児童生徒の姿や地域の実態を再評価し、指導計画や指導法を柔軟に見直すことができる

指導計画や教育課程表の作成・協議に当たって他の教科や学校目標との効果的な連携を常に意識している

個人アンケート



管理職アンケート



経験者の声

- 在外教育施設には、**全国各地から教師が集まってくる。様々な教授法や授業づくり、学級経営などをみて、「ここは取り入れよう」「ここは自分のやり方を大事にしよう」など摺り合わせながら取り組んでいくことはとても創造的な経験**だった。
- 派遣を経験したことで、**新しいことを積極的に取り入れられるようになった**。日本人学校は2～3年のサイクルで教師が入れ替わるため、「昔はこうだった」ということが起きない世界。その時その時に派遣されている教師が、**今一番良いと考える教育を行おうとチャレンジする場所**になっている。
- 日本では教育計画が定められており、教える順番や教材が決まっている。ところが派遣国では、気候が温暖であるため、植物は植えた瞬間にすぐ大きくなってしまって、日本の教科書が役に立たず、日本と同じ教え方はできない。**現地の教科書を使いながら、日本のカリキュラムの中で獲得すべき知識を教える必要があるため、派遣教師はそうしたことが自動的にできるようになっている**だろう。
- 理科の場合、実験器具が限られていたため、自作の実験器具を作ることが多かった。**日本と違って、教材も教具も十分ではない環境下で、何とか日本と同じような教育を提供するべく創意工夫を行う力**はついたと思う。

3

学校の管理・運営能力

学校組織における中心的な役割を担うとともに、教員の指導力・対応力の向上に対して適切に指導・助言を行うことができる

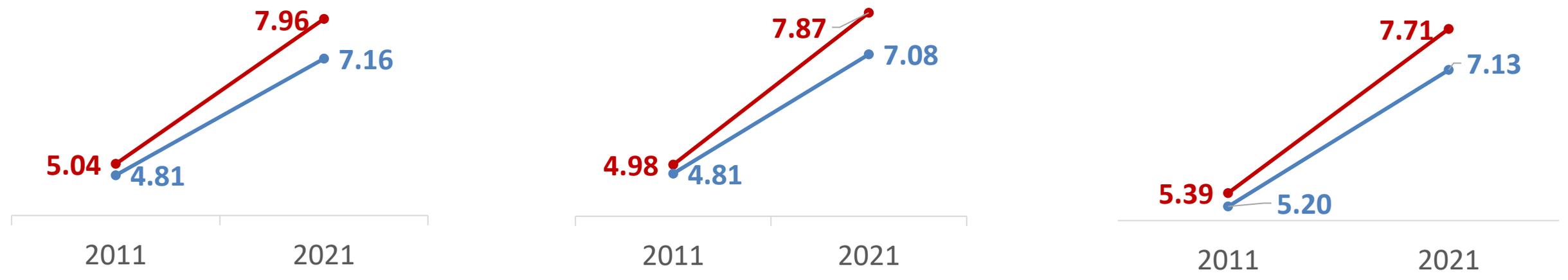
学校の課題を発見し、上司等に対して問題提起や対応策の提案を行い、解決につなげることができる

教育活動の改善に向け、保護者や地域、外部機関と協働を行うことができる

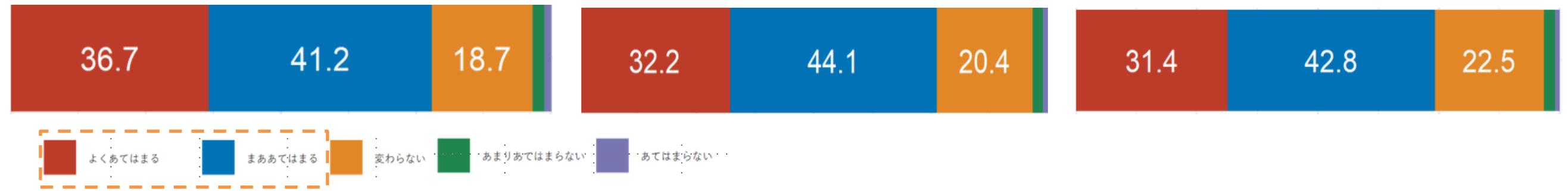
個人アンケート

管理職アンケート

経験者の声



● 派遣経験あり (n = 784) ● 派遣経験なし (n = 2,947)



よくあてはまる (red) まああてはまる (blue) 変わらない (orange) あまりあてはまらない (green) あてはまらない (purple)

- 自身が派遣された学校は、1人あたりの月謝がとても高く、**高額な月謝を支払ってまで通わせる価値のある学校なのかが問われていた**。企業は、日本人学校の教育環境を守るため、あえて家族のいる人を派遣し、会社の収益から学費を出している。我々がそれに見合う教育を提供できなければ、企業は単身者を派遣するようになってしまう。**日本だと授業が下手でも学校はつぶれないが、日本人学校だとそうではない。**
- 自然災害が起こり、国内旅行をしていた先生と連絡が取れなくなった。緊急時の対応等は総領事館や大使館、外務省と直接やり取りする形になった。また、テロもあったが、その時は校長先生が日本に帰国していたので、自身を含めて少数での対応だった。**マニュアルもない中で、自分で最善の方法を考えるしかなかったが、この経験は、今般のコロナ禍での対応に活かした。**
- 日本の学校では、管理職が決めて、現場に降ろすトップダウンが多いが、現地では、現場の教師が日本人会と相談を行い、予算の使い方や会議で意見をまとめるといった経験をした。管理職には、そこまで考えることを求められていると学びがあった。**20代という若い年齢で学校の中心となって働いたが、その立場で働く責任がすごく大きかった。その時に苦労した経験が活かしている**実感がある。